

新刊
紹介

For some in ancient books delight;
Others prefer what moderns write:
Now I should be extremely loth
Not to be though expert in both.

加藤正男著

『債権法各論(契約総論)』

(法律文化社、A5判
一七四頁、一、二〇〇円)

一 法解釈学にならずさわる者の遍歴の到達点は、体系の構築、したがって体系書・教科書を書くことではないか。最近わたくしはこのようにも考えている。本書は、すでに一九五八年に出た旧著を土台に、その後の判例・学説の変貌・展開をふまえて、より美しい姿で、学界の花道に登場してきた。加藤教授の意欲と力量をみるべきであろう。表題を正確に記せば「債権法各論(契約総論)」であり、やや誤解を招くおそ

れもないとはいえないが、ユーモラスであり、内容的には繁簡精粗かならずしもよろしきを与えていないところに、温か味とゆたかな余力を伺うことができよう。人も知るように、教授は「マルキシズム法社会学の領袖」をもって任じられておられるだけにその法律行為論がどのような構造をもちうるかを明らかにされることを、期待できるのは、わたくしだけでなく、民法学界にとっても、喜ぶべきことのように思われる。

二 法社会学の成果を吸収し、比較法的学习を駆使されているわりに、意外と本書における手法は正統派である。関西いながら京都で育った学者に宿命的なものであるうか。突如として、前の文章と一見無関係な叙述に出くわすことがある。口にあう、たべやすい物ばかりではなく、歯と胃液その他すべての消化器官をフル回転させねばならぬ食物を与えることは、必要不可欠である。教授の配慮はこのあたりにも心憎くさを見せる。読者は随所に立ち止まって反芻すべきである。ところで、判例が客観的な理論体系と形成しているかは、わたくしには、うんとつめて議論しなければ、断定

のできない問題である。しかし、判決がある結論を出したことは所与の事実なのであるから、法の現実相・具体相を知るためには、判例は不可欠の手段である。その意味で、本書で数多くの判例が引用されているのは、有意義である。それだけに、たえず注意を払って改訂していかねばならない。骨の折れることではある。

三 定評のある、二、三種の体系書を傍らに、ときどき思いつきをまじえ、タネ本の一部とつぎはぎして教科書を書く人が増えてきたように思う。これとても決して悪いことではない。パンデクテン法学や日本の法学だって、右と大同小異のいきさつを経て発展してきたのであるから。しかし、加藤教授のこの教科書は、そういう安易な——点教主義と金もうけのため——動機から書かれたものではない。「はしがき」にみえる勇氣りんりんたる態度は、このことを雄弁に物語る。法学部の諸兄に一読をおすすめしたい。さいごにふたこと。ひとつは、巻末の外国法諺の訳は便利ではあるが、訳出にいま少しくふうがほしい、というあげ足とりめいた望蜀の辞。もうひとつは

どの本がいい本であるかは、結局のところ自分が読んで決めるよりほかない、というあたりまえではあるが、拙ない紹介にさいしての通辞―百聞一見に如かず、評価は見てもお帰りで。ついに語るに落ちたようである。(石田喜久夫・大学法学部嘱託講師)

エチュード・グループ

訳詩集『FETUDE』

(エチュード・グループ)
A5判、六十五頁)

同志社では、明治二十年代に、磯貝雲峰、湯浅半月などの詩人を中心に「同志社文学」なる雑誌が刊行され、九年の長きにわたって、詩や論説を発表し、欧米の文芸を啓蒙期の日本に紹介して、世間の注目をあびたが、やがてさような文芸趣味はうすれ、訳詩を楽しむということは稀であった。ところが、今度刊行された「エチュード」は在来の空白を満たし、優れた訳詩をもってその声価を世間に問う種類のものがある。これは英文科の詩人教授児玉実用氏を中心に、約十名の同志社出身の俊英によ

るきわめて高邁な訳詩集である。収められた内容は、イエーツ、デ・ラ・メア、D・H・ロレンス、エズラ・パウンド、T・S・エリオット、E・ブランドン、W・H・オーデン、ディラン・トマスなど二十世紀の英詩壇を代表する一流詩人の作品二十五篇を、原詩の意味を尊重しながら自由に訳出したものである。それらの詩の内容はさまざまであるが、その大部分はきわめて意味深長な象徴詩である。

イエーツの「薔薇の木」(児玉実用氏訳)は枯れなんとするばらの木に関する対話であるが、祖国アイルランドへの熱情を声高く歌っている。ヤングの「ウィルトシアの丘」(村田辰夫氏訳)でも、郭公や牧童や「樹木を冠ったほそ長い塚」は、広漠たるウィルトシアの丘の点景ではあるが、同時にそこにはあの不思議なストンヘンジや多くの塚や大寺院が暗示する人類の姿がある。サースンの「序曲・軍隊」(原田俊孝氏訳)は、第一次大戦における兵士の空しい苦勞を歌っているが、われわれにはベトナム戦争の兵士たちの苦勞が思いやられる。オーウエンの「無駄はたらき」(児玉

実用氏訳)も戦争の空しさを歌ったものだが、ここに収められた詩に戦争や死を歌ったものが多いのは、原詩集編纂の時期によるのであろう。(原本は一九五四年に編集されたコリンズ社版 *Golden Treasury of "Additional Poems"* のある)。ブルックの「天国」(堤愛子氏訳)、ウエルズリーの「亡くなった子供」(薬師川虹一氏訳)、ウェストの「大きな猫たち」(佐武幸江氏訳)などいづれも死に関連する神秘的な詩である。スペンダーの「海」(薬師川氏訳)やD・トマスの「しだしげる丘」は更に一層象徴的神秘的である。前者は一組の男女の恋の背景に砂浜を渡る二匹の蝶のたわむれを写しながら人間の恋のはかなさを語っている。後者「しだしげる丘」は坂本完春氏の訳だが、最後に重々しく堂々とリズムゆかしくしめくくっている。「目がさめると農園は朝露に白くぬれ さすらい人のように肩におんどりを乗せて帰ってくる あたりがすっかり明るくなる アダムと処女のように 空はふたたび白らみ その日も陽はまるくなる」といった調子。読んでいて楽しい。(岡本昌夫 女子大学教授・英語・英文学)